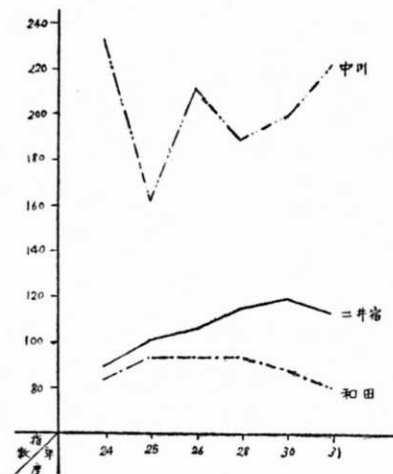


第8表 給与飼料構成タイプ

| 項目 | 区分<br>構成タイプ | TDN |      | DCP |      |
|----|-------------|-----|------|-----|------|
|    |             | 戸数  | 比率   | 戸数  | 比率   |
| 冬季 | 濃厚飼料型       | 21  | 15.7 | 98  | 73.2 |
|    | 茎稈濃厚飼料型     | 28  | 20.8 | —   | —    |
|    | 飼料作物濃厚飼料型   | —   | —    | 15  | 11.2 |
|    | サイレージ濃厚飼料型  | 21  | 15.7 | —   | —    |
| 夏季 | 野草型         | 35  | 26.1 | —   | —    |
|    | 濃厚飼料型       | —   | —    | 71  | 53.0 |
|    | 野草濃厚飼料型     | 47  | 35.1 | —   | —    |
|    | 蚕沙濃厚飼料型     | —   | —    | 14  | 10.5 |
| 年間 | 飼料作物型       | 16  | 11.9 | —   | —    |
|    | 濃厚飼料型       | 47  | 35.1 | 93  | 69.4 |
|    | 飼料作物濃厚飼料型   | —   | —    | 22  | 16.4 |

極めて多くなっている。夏季飼料構成においても濃厚飼料への依存が非常に高い。すなわちTDNでは濃厚飼料野草型が47戸の35.1%を占め、DCPでは濃厚飼料型が71戸の53%となっている。年間の構成についてみても同じ傾向であって、TDN・DCPの何れも濃厚飼料型が第1位を占める。高畠地区の酪農は古い歴史を持っているのであるが、酪農経営のあり方には解決を要する大きな問題を多くかかえており、特に飼料問題は大きな課題



第1図 乳牛頭数の趨勢

といえる。一方調査対象集落の乳牛頭数の趨勢をみると第1図の如く、二井宿・和田では最近減少の傾向が見られ、これは乳価と飼料代とのシェーレ現象に起因しているのであって、生産費の低下を計ることが緊要である。このためには購入依存の酪農から自給飼料の利用度を農経営に切り替えることが発展策の第一歩であり、これ高める酪が対策としては現在の分散されている古木高刈桑園を整理統合することによって飼料専用畑としての利用度の拡大・採草地の改良並びに良質飼料作物（牧草類）の導入が望ましいのであって、これらの諸問題こそ地域の酪農経営改善の重要課題となろう。

## 岩手県北畑作地帯の農家経営における大豆の地位と役割

中谷真也・松田主一・佐藤宏三

(岩手県農試)

この研究は「大豆生産安定のための総合研究」の一部としてわれわれが担当したもので、岩手郡西根村渋川部落全戸32戸の調査を主体にして考察したものである。

この調査では特に大豆が経営全体の調和にどのような立場と役割を果しているか、それが経営内外部の条件の変化に対応してどう変ってきたかを明らかにしようとした。

従来この地方の畑作経営は作自相互に緊密な補完関係をもつ自給生産様式によって続けられてきたが、戦後特に最近の米生産量の増加・生活特に食生活慣行の変化・商品経済の滲透・馬需要の減退・兼業従事機会の減少・

農産物価の下落等経営内外部的な変化は、商品生産部門の導入拡大と畑自給作の縮少をもたらしつつある。

ヒエ・アワ・ソバは漸次商品作または飼料作に代替されてきたが、大豆はあまり大きな増減をしていない。ということは大豆の多面的な性格が全体の調和にとって現在なお有用なものであることを物語っているものと考えられる。

生産大豆の仕向け別数量は農家一戸平均販売4.9石・飼料0.7石・食糧1.4石である。

食糧としての仕向けは階層差が大きく一人当り量としてみても、小階層農家では販売量増加のため最少限に圧

縮している傾向がある。用途は味噌・豆腐・納豆であるが他の地域農家の年間1人当り量に比べ、かなり多量の消費が行われている。これはこの地方の食慣行をよく物語るものであるが、大豆は農家の副食の重要な源泉となっており更に穀類消費の配分をみると水田の多いこの地方の農家にとっては、ヒエ——小麦・大豆の作付体系そのものが主食・副食生産の体系としての役割をもっていることが窺われる。

大豆の飼料仕向け部分は主に冬期あるいは使役時の濃厚飼料として用いられている給与総T・D・N量中では、馬・役牛飼養農家で20%前後、乳牛飼養農家では10%内外で割合が低いが、農家は一般に超濃厚飼料として高い価値評価をしている。莢莖はヒエ稈とともに冬期粗飼料の90~100%を占め、この両者の手持量は事実上農家の家畜飼養頭数決定の最大要因となっている。家畜飼養とヒエ・大豆作との結び付きは以前程固定的でなく弱まってきたが、このような点で現在なお飼料の主体をなしている点に変わりがない。

大豆の販売量は小階層程少ないが、一般的には畑を積極的商品生産に利用し得る基盤をもつ農家、すなわち水田面積が大きく耕地1人当り労働負担面積の多い農家は大豆販売収入に対する依存が少ない。

岩手統計調査事務所昭和31年度生産費調査の結果によると大豆の反当粗収益は8,030円で多くないが、生産費が著しく低いために純収益は4,448円で他の作物より多くなっている。しかしながら農家はこのことよりも商品としての大豆については現金収支上の有利性と、生産と

価格の安定性を非常に高く評価している。最近の価格変動は大豆のこのような有利性を少くし、農家の現金収入の不安定化を激化する一因となっている。

農家の年間の労働配分状況をみると、多少問題となる点はあるけれどもほとんど完全に近い均衡状況を示している。大豆はこれの中にあって全作付規模の4分の1の面積にかかわらず、大豆故に著しい労働ピークを形成することはほとんどない位の少労力で栽培されている。しかも各作業が概して他の作物の繁期の間隙に行われ、他の作物の重大な作業と競合することも少い。結果としてみるならば大豆はヒエとともに全体の作物構成の中で、労働の面では調整上の重大な役割を果たしており、他の作物特にたばこのような集約的商品作物の存在を容易にしているといえる。

大豆を組入れた作付体系として現在一般にとられている体系は、ヒエ——大豆、ヒエ——小麦・大豆、たばこ——小麦・大豆でそれぞれ6割、2割5分、1割5分の割合となっているが、大豆は集約体系の中でも粗放体系の中でも少肥性・地力の維持増進性・間作適応性が組合わされた作物の多肥性・地力消耗性・土地占有期間等の性格と適合して合理的土地利用形態を構成するように利用されている。

以上がこの地方の農家経営における大豆の性格の概略であるが、各性格の一面のみをみれば大豆の果たしている役割は他の作物に比べ特に優れていないが、農家経営全体の中では各部門の調和のために非常に多面的で欠くことの出来ない役割を果たしているといえる。

## 大豆の需給と商品化

大 場 茂 男

(東北農試)

### 1

大豆の需給を取扱うに当っては一般的な大豆経済にふれなければならない。いうまでもなく、大豆は脂肪と蛋白の両者を多量に含む農産物でその用途は多様多岐に亘る。その成分から油脂大豆と蛋白大豆として、また大豆の加工段階別の形態により丸大豆・脱脂大豆・大豆油の所謂大豆3品として、それらは直接食用・農用の外食品原料・工業原料として広汎な用途をもち、その多様性が加工段階的・形態的に重り合ってその需要は複雑であ

る。用途の多様性はまた他の代替商品との競争関係において需要に影響を与えている。供給の面においても市場出廻り量の70~80%は輸入大豆であり、国際収支事情が大きく影響する。近代的な大量生産と流通を背景とする輸入大豆と零細な生産と流通の後進的な国産大豆が用途の多様性のもとで交叉しているのである。このような需要と供給の二重構造が大豆経済を複雑なものとして特長づけている。本報告では主として東北地域を対象とする大豆の需給についての展望を与え、就中、岩手と山形を